

拓精神を十二分に發揮出来たことに満足いたしております。

若き日の思い出

山形県 大山 きぬよ

昭和二十年四月二十一日、私達報国隊五十八人は家族その他大勢の人々に見送られて楯岡駅を出発した。

当時十六歳の最年少の組で家を離れることは初めての経験であったし、汽車の窓から顔を出しても胸が一杯で何も言えず、ただありったけの涙だった。

新潟港から大きな船に乗った。友達と甲板に上ってみたら、きらきら輝いていた赤や黄の新潟港の明かりがもうどこにもなく、真っ黒い海に私達に乗った船がただ一つあるだけだった。何も見えない。友達とそれこそ涙も声もかされるほど泣いた。どうしてこんなところに来てしまったんだろうと。

どこの家でも国のため一人ぐらいは戦争に行っている

のに、私の家では行っていないので、子供心にお国のためなら喜んで、と一人決心して来た私だったが、ボウと鳴るドラの音を聞いても淋しく思った。

赤い夕日の満州は汽車の窓から見ても山一つなく、どこまでもどこまでもはてなく続く大陸だった。

協和開拓団に着いたのは夕方、出迎えの皆さんがたくさんのゆで卵を持って来てごちそうして下さったのが強く印象に残っている。

私達報国隊五十八人の団体生活は規則正しく、毎日農耕の手伝いだったが、一週間交替の炊事当番だった。小麦粉や黒砂糖など一俵のままの袋や樽から取り出している料理で内地ではとても考えられないくらい何でも豊富だった。

ある日待ちに待った手紙が夕方薄暗くなってから届き、ランプの下で母の名前を見た瞬間、もう涙がぼろぼろ出て読むことができないほど嬉しかった。

八月十五日、無条件降伏の知らせがあったからは一変して想像もつかない苦しい生活の始まりとなった。

私は心の中で、私はどうなってもいい、うちのお年寄

りと家族だけは何とか私の分も生き残っているように祈った。

玉碎する場所と定めた団本部まで何キロ歩いたか、本部についてみると玉碎しないことになっていた。

次の朝、部屋に帰ってみたら、家の中にはもう何ひとつなく、満人がみんな持ち運んで行ってしまった後だった。衣類も食料も台所道具まで一切奪われてしまった。

本島に着の身着のまま、翌年の八月まで人間とは思えないような悲惨な生活だった。苦勞などというものではない。

全員引き挙げとなって帰る途中、チチハルや新京でコレラ伝染病のために数人の友達は亡くなってしまった。

一か月滞在させられて、コロ島から乗船して佐世保の山が見えたとき泣いて喜んだのに、チフス患者がでて二週間も上陸できなかった。この間はとても惨めな気持ちでしたが、その後上陸できて故国日本の土を踏んだ。

楯岡駅について、顔も汚れて黒く、ぼろぼろの着物で楯岡町役場に案内されて食べさせてもらったおにぎりのおいしかったことは忘れることができない。

最後にあんなむごい戦争など二度とないように、亡くなられた友達のご冥福を心からお祈りする。

報国隊員として

山形県 鈴木 喜阿子

私は報国隊の一員として開拓団に食糧増産に励むため渡満した。本当に意義ある日々を送ったのは終戦までの四か月足らずである。

終戦を知ったのは三、四日も後だったと思う。皆泣いた。もう二度と日本へは帰れないし、皆働くことも生きることへの気力も失って、やり場のない悲しみに泣いたのだった。

その上、くる日もくる日も恐怖の毎日でした。昨日の極寒が一夜にして地獄と化したように当時の苦しさは経験した人でなければ分からないだろう。そして多くの団員、また私達の仲間にもその犠牲となって亡くなった方々があった。本当に悲しかった、今でも思い出すこと